


在外研究員研究報告書

2021年6月9日 受付

所 属	神学部		氏 名	森山 央朗 	
職 名	教授				
研究課題名	スンナ派形成と「ハディースの徒」の知的実践の連関的研究				
研究期間	2018年 4月 25日 ~ 2019年 3月 16日				
滞 在 期 間 ・ 滞 在 地 研 究 調 査 先	滞 在 期 間		滞 在 地		研 究 ・ 調 査 先
	2018年4月25日～2018年12月13日		アメリカ合衆国 ワシントンDC		ジョージタウン大学外交学院アルワ ード・ビン・タラール王子ムスリム キリスト教徒理解センター
	2018年12月14日～2019年1月23日		国内研究		
	2019年1月24日～2019年3月16日		トルコ共和国 イスタンブル市		イブン・ハルドゥーン大学 諸文明協調研究所
研 究 費	266.4万円		研究成果の概要		別記 4,000字程度
発    表	題 目 名		発表学術誌名 Vol. No.		発行年月日
	Using Hadiths in the Appropriate Style: Scholarly Practice of the Shafi'i Aṣḥāb al-Ḥadīth (Special Feature: Hadith in Islamic Thoughts and Practices)		Annals of Japan Association for Middle East Studies, 36-2		2021年3月15日
	著 書 名		発 行 所 名		発行年月日
	演 題		講 演 学 会 名		講演年月日
Scholarly Practice of the Medieval Aṣḥāb al-Ḥadīth and Their Social Authority		The Hadith in Islamic Thought and Practice		2018年11月5日	
Scholarly Practice of Khurāsānī Aṣḥāb al-Ḥadīth and Spread of the Prophetic Sunna in the Medieval Muslim Society		Hadith and Scholars: Its Formation and Challenges		2019年2月13日	

研究課題名：スンナ派形成と「ハディースの徒」の知的実践の連関的研究

## 1. 研究の背景

本在外研究は、科学研究費補助金による研究事業「「ハディースの徒」の社会史的研究：スンナ派の形成・浸透過程の解明に向けて」（基盤研究C：26370840）を基課題とする、国際共同研究加速基金による研究事業「スンナ派形成と「ハディースの徒」の知的実践の連関的研究」（国際共同研究強化：16KK0043）として行った。基課題の研究事業の背景には、イスラーム地域の紛争は、しばしばスンナ派とシーア派の宗派对立と本質論的に語られるが、宗派は歴史的に形成され、社会状況に応じて変化するものであり、宗派を理解するためには、思想だけでなく、それを支える知的実践の形成と変容の歴史を、社会と関連づけて論究するべきであるという認識があった。この認識を背景とした基課題の研究目的は、ハディースをめぐる知識体系であるハディース学の10世紀から13世紀にかけての西アジアにおける展開と、それを担ったウラマー（イスラーム宗教知識人）、なかでも「ハディースの徒（Aṣḥāb/Ahl al-Ḥadīth）」と自称したハディース学者の知的実践を社会史的に解明することであった。

ハディースとは、預言者ムハンマド（632年没）の言行に関する伝承であり、現在のイスラームの多数宗派であるスンナ派は、ハディースを主要な典拠とする預言者の慣行（スンナ）の遵守を理想とする。スンナ派は、預言者死後のウンマ（イスラーム共同体）の指導権をめぐる政治的闘争と、イスラームをめぐる宗教的・思想的論争を経て、11世紀頃の西アジアで確立された。したがって、11世紀を挟んで、10世紀から13世紀にかけて（古典イスラーム期）の西アジアのムスリム（イスラーム教徒）社会において、ハディースをめぐるどのような議論と知的実践が行われ、それらの議論と知的実践が、ハディースとスンナの権威をどのように社会に浸透させていったのかを研究することは、スンナ派の形成と浸透の歴史的過程を解明する上で不可欠である。自分たちのウンマがスンナに則っているという実感は、社会に存在する様々な事柄をスンナに依拠して価値づけることで得られ、その価値付けの正当性は、依拠したスンナの典拠となるハディースの真正性の証明に依拠するところが大きいからである。

## 2. 研究の目的

本在外研究の目的は、上記の基課題の研究の総括作業を国際共同研究として行うことであった。その理由は、ハディースや「ハディースの徒」に関する研究の蓄積が日本にはないため、(1) 国際的な研究環境の中で十分な批評に晒すことで、研究成果の水準を高める必要があったことと、(2) ムスリム（イスラーム教徒）の研究者との建設的な議論をとおして、「オリエンタリズム」的な研究になることを防ぐことが必要だったからである。

基課題は、研究目的の達成に向けて、以下の三つの課題を設定していた。すなわち、【課題1：「ハディースの徒」時代的・地理的分布の傾向の整理】、【課題2：ハディース真正性判定理論の形成・展開の解明】、【課題3：「ハディースの徒」の知的実践と社会状況の相互影響の解明】である。基課題は、2014年度から続けられており、2018年度に本在外研究を開始するまでに、上記三つの課題に関する研究作業をほぼ完了し、次ぎような成果を得ていた。

【課題1】に関する研究成果としては、8世紀以来、イスラーム世界のほぼ全域で、様々なウラマーが「ハディースの徒」を名乗って、多様な主張と活動を展開してきたことを確認した。その一方で、「ハディースの徒」の主流は、シャーフイー法学派を支持するハディース学者であり、中でも、10世紀前半のホラーサーン（イラン北東部）に遡る学統に連なって、10世紀後半から13世紀前半にかけて、ホラーサーンからイラク、シリアに至る地域で活躍した「ハディースの徒」が、ハディースをめぐる知識体系（ハディース学）の発展に重要な役割を果たしたことを明らかにした。【課題2】に関しては、ホラーサーン系シャーフイー派「ハディースの徒」が著したハディース学理論書を分析し、10世紀後半から11世紀前半のホラーサーンで、ハディースの真正性

研究課題名：スンナ派形成と「ハディースの徒」の知的実践の連関的研究

を判定・証明するための様々な方法と理論が提唱され、それらの方法・理論が利用と議論を経て洗練されつつイラクやシリアへも伝播し、12世紀後半から13世紀前半にかけて、ハディース学の古典理論に結実していく過程を跡づけた。【課題3】に関する研究作業からは、以下の2点が明らかになった。すなわち、(1) 11世紀から12世紀に、ホラーサーンからシリアにかけての各地で活動した「ハディースの徒」は、10世紀後半のホラーサーンで提起されたハディース真正性判定理論を柔軟に活用し、社会や政治が要請する様々な事柄をスンナに根拠付けてイスラーム的な価値を保証する著作を数多く執筆し、それらの著作はハディース学者の知的実践の中で評価されると同時に、社会的にも広く受容されたと考えられること。(2) しかし同時に、「ハディースの徒」は、彼らの権威の源泉であるハディースの真正性の価値を維持するために、真正性判定理論を厳格化せざるを得ず、そのことが、13世紀後半にかけて「ハディースの徒」の活動を停滞させていったことである。

本在外研究は、上述の基課題の研究作業の成果を、ハディース学を研究する海外の研究者と継続的な意見交換をとおして総合的に検討し、国際的な研究水準に照らしてより高度なものとするを目的とした。また、ハディースは、イスラームの信仰の根幹に関わるものであるため、現在のムスリムがどのようにハディース学の伝統を継承しているのかを完全に無視して、その成果を日本においてのみ発表することは、他者の宗教の歴史を、その外部において一方的に語るという「オリエンタリズム」的な状況に陥る危険がつきまとう。したがって、ムスリムが多数を占める国において、イスラームの信仰を持ってハディースを研究している研究者との議論を通して、基課題の研究が「オリエンタリズム」的な研究となることを防ぐことも目的とした。

### 3. 研究の方法

以上の研究目的の達成に向けて、アメリカ合衆国ワシントンDCに所在する、ジョージタウン大学外交学院アルワリード・ビン・タラル王子ムスリム-キリスト教徒理解センター (ACMCU: Prince Alwaleed bin Talal Center for Muslim-Christian Understanding, School of Foreign Service, Georgetown University)、および、トルコ共和国イスタンブール市のイブン・ハルドゥーン大学諸文明協調研究所 (MEDIET: Medeniyetler İttifakı Enstitüsü, İbn Haldun Üniversitesi/Alliance of Civilizations Institute, Ibn Haldun University) において在外研究を行った。ACMCUにおける海外共同研究者は、センター長であったブラウンJonathan A.C. Brown准教授であり、MEDIETにおける海外共同研究者は、学長兼センター長であったシェントユルクRecep Şentürk教授であった。ブラウン准教授は、欧米におけるハディース学研究を牽引する研究者の一人であり、シェントユルク教授は、ウラマーの伝統を引くハディース学に深い造詣を持つとともに、コロンビア大学（アメリカ合衆国、ニューヨーク市）で社会学を修めた。シェントユルク教授との共同研究は、基課題の研究を「オリエンタリズム」的なものなることを防ぐという、本国際共同研究の目的の達成に極めて有効であった。

具体的な研究作業については、以下のとおりである。

2018年4月から12月にかけて、ACMCUに客員研究員 (Visiting Researcher) として滞在し、在外研究を行った。ブラウン准教授との共同研究においては、継続的な意見交換と文献・史料の精読・読み合わせを行うという堅実な方法を採用した。加えて、ブラウン准教授の指導下の大学院生やACMCUに関係する研究者たちと意見交換を行い、欧米におけるハディース研究の最新の知見や研究動向に関する情報を収集した。また、基課題と本国際共同研究の成果を発信し批評を仰ぐために、ACMCUにおいて11月4日・5日の二日間にわたってブラウン准教授と共同で国際研究集会、*The Hadith in Islamic Thought and Practice*を開催し、研究代表者とブラウン准教授がそれぞれの研究成果を発表した。この研究集会には、研究代表者とブラウン准教授に加えて、イスタンブール大

研究課題名：スンナ派形成と「ハディースの徒」の知的実践の連関的研究

学神学部（Faculty of Theology, Istanbul University）からネジュメッティンNecmettin Kızılkaya准教授とヨルルマズNilüfer Kalkan Yorulmaz研究員（Research Associate）を、イリノイ大学人文学部（College of Liberal Arts and Sciences, Illinois University）からダンMichael H. Dann助教を、MEDIETから山本直輝助教を招待し、彼らの研究発表も合わせて、ハディース研究に関する意見交換を行った。以上の主要な研究作業の他に、ハーヴァード大学（6月19～23日、アメリカ合衆国マサチューセッツ州ケンブリッジ）とシカゴ大学（10月15～18日、アメリカ合衆国シカゴ市）でアラビア語写本史料と関連研究文献を調査・収集し、中東研究学会（Middle East Studies Association）の年次大会（11月15～18日、アメリカ合衆国テキサス州サンアントニオ市）に参加して研究情報の交換・収集を行った。

以上のACMCUにおける在外研究を12月に終え、一時帰国した。帰国中は、国内研究として、ACMCUでの共同研究で得た知見を整理するとともに、次のMEDIETにおける共同研究の準備を行った。なお、計画段階では、ACMCUでの在外研究の後、テヘラン大学イスラーム神学部（Dāneshkade-ye Elāhīyat ve Ma‘āref-e Eslāmī, Dāneshgāh-e Tehrān/Faculty of Theology and Islamic Studies, University of Tehran, イラン・イスラーム共和国テヘラン市）においてマアーレフMajīd Ma‘āref准教授と共同研究を行う予定であった。しかし、ACMCUでの共同研究を通じて、主にイラン国内で研究を行ってきたマアーレフ准教授よりも、上述のとおり、ウラマーの伝統と近代社会学の双方に通暁したシェントユルク教授とMEDIETにおいて共同研究を行うことの方が、本在外研究の目的にとってより有効であることが明らかとなり、シェントユルク教授からの受入の承認を得た後、渡航先海外機関の変更を申請して認められた。

2021年1月から3月にかけてMEDIETに客員研究員（Visiting Researcher）として滞在し、シェントユルク教授と意見交換を行うとともに、MEDIETに関係するトルコ内外の研究者たちと継続的に交流し、本国際共同研究および基課題の研究手法と成果が、ムスリムとしてハディースなどを研究する視点から見ても、一定の妥当性と有効性を持つことを確認した。また、2月13日にMEDIETが開催した公開講演会、*Hadith and Scholars: Its Formation and Challenges*において、シェントユルク教授と並んで登壇し、研究発表を行い、聴衆と質疑を交わした。

#### 4. 研究の成果

上記のように進展した在外研究によって、基課題で設定した三つの研究課題に関する研究作業の成果について、海外共同研究者と共同作業や研究集会の参加者との議論などによって批評を仰ぎ、それらの批評を盛り込んで各課題の成果を総合的に考察し、研究全体を総括した。この総括作業によって、以下の3点を解明した。すなわち、(1) 「ハディースの徒」を称したウラマーたちが、知識人としての評価を得るために行った知的実践の成果を用いて、周囲の社会的・政治的要請にも良く応えていたこと。(2) そうした社会や政治に対する協力的な姿勢が、彼らの社会的権威にもつながっていたこと。そして、(3) 社会や政治の多くの側面を、ハディースをとおしてスンナに結びつけようとする彼らの姿勢と活動が、スンナに則った共同体の一員と自らを想像する人々、すなわち、スンナ派の形成に大きく貢献したと考えられることである。

これらの研究成果は、基課題の計画段階から予測されていた成果にほぼ沿ったものである。本在外研究は、「ハディースの徒」の知的実践の社会史的な分析からスンナ派の形成・浸透の歴史的過程を考察する基課題全体の研究成果を、国際的な研究水準に照らしてより高度なものとしたことで、スンナ派の形成と浸透の歴史過程の解明に寄与したと評価される。以上の研究成果に基づき、2018年11月にACMCUで開催した国際研究集会で、“Scholarly Practice of the Medieval Ashab al-Hadith and Their Social Authority”と題する研究発表を行い、2019年2月にMEDIETの公開講演会では、“Scholarly Practice of Khurasani Ashab al-Hadith and Spread of the Prophetic Sunna in the Medieval

研究課題名：スンナ派形成と「ハディースの徒」の知的実践の連関的研究

Muslim Society”という標題で発表した。この講演会における研究発表は、アナドル通信 (<https://www.aa.com.tr/en/turkey/istanbul-panel-discusses-hadith-their-transmission/1391865>) などのトルコのメディアに取り上げられた。

なお、本在外研究は2018年度1年度で完了したが、資金となった国際共同研究加速基金には余剰が発生した。その主な理由は、国際共同研究加速基金への申請時においては、在外研究先であるACMCUを起点に欧州やトルコへの研究出張を予定していたが、在外研究員にはシリアやイランへの研究目的での渡航歴があったことから、米国が入国管理の厳格化（特に中東諸国出身者および渡航歴のある者に対する）を進めていた折りに出国することは、再入国を拒否される懸念が生じたため、米国外への出張を断念せざるを得なかったためである。加えて、基金の規定では可能であっても、本学の規定では、在外研究の滞在費と在外研究先を離れての出張費を重複して支出できないことが判明し、出張中の滞在費を基金に繰り戻すこととなったため、米国内の研究出張で執行された経費も限定的なものとなった。

余剰資金が発生した国際共同研究加速基金については、国内における研究事業の2年間の延長を申請し、認められた。その目的は、(1) 2018年度の在外研究で構築した米国及びトルコの研究者とのネットワークを活用して基課題の研究目的をより精緻に達成し、(2) ACMUCで開催した国際研究集会の成果を学術雑誌上の英文特集として公開することであった。これら2点の目的は、2020年度までに達成された。